

果樹カメムシ類について



図1 チャバネアオカメムシ



図2 チャバネ3齢幼虫(約6mm)



図3 クサギカメムシ



図5 ナシの被害果



図4 落果したカキの幼果



図6 ウメを加害するチャバネ

1 生態

果樹を加害するカメムシは30種以上いるが、本県での主要な加害種は平坦地域ではチャバネアオカメムシ（体長約11mm、体色は緑色で褐色の翅をもつ）、中山間地域ではクサギカメムシ（体長約15mm、体色は暗褐色で、不規則な赤褐色斑がみられる）である。被害はカキをはじめナシ、モモ、リンゴ、ミカン、ウメなど多くの果樹で認められる。

越冬場所は種類によって異なり、チャバネアオカメムシは山林の落葉下、クサギカメムシは樹皮下や家屋の隙間などである。春期に越冬場所から離脱し、サクラやクワなどの果実やキリを餌として生活し、その後は繁殖に好適なスギやヒノキへ移動する。カメムシの主な生息場所は山林であり、十分な餌が得られれば山林からの離脱は少ないが、餌が不足すると果樹園などへ飛来し加害する。被害は口吻を果実に刺し、吸汁することで発生する。カキでは幼果時に数カ所加害されると落果する。しかし、8月中旬以降に加害を受けても落果せず、吸汁痕はややへこみ、早期に着色する。ナシやリンゴでは果実肥大期に吸汁されると、吸汁箇所は肥大せず奇形果となる。成熟期では吸汁痕は目立たないが、吸汁部分はスポンジ状となる。

2 発生状況

果樹カメムシ類の寿命は長く、前年夏期の成虫が越冬し、翌年夏期に新世代を産む。発生最盛期である夏期では、卵から成虫まで生育する期間は約30日、産卵前期間は約15日である。

予察灯への誘殺はおよそ5月下旬頃よりみられ、8月上旬に最盛期が認められる。しかし、生息場所である山林での餌、特に繁殖・生育に重要なスギ・ヒノキの球果の豊凶が強く影響しており、年次による変動が大きい。また、春期に餌不足となると5月に多数の誘殺がみられる場合もある。

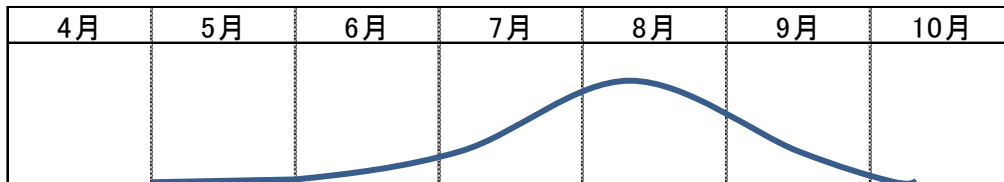


図7 チャバネアオカメムシ予察灯誘殺数の推移

3 発生予察

果樹園内で果実の吸汁被害を確認してからの防除では、手遅れとなることが多い。そのため、発生予察が重要となる。岐阜県病害虫防除所ではチャバネアオカメムシ越冬量調査および指標植物での加害状況調査、予察灯・フェロモントラップへの誘殺状況調査を実施しており、防除の参考とされたい。

(1) チャバネアオカメムシ越冬量調査

冬期に山林等より落葉を1地点あたり50リットル採取し、目視により越冬成虫数を調査する。越冬量を調査することにより、その年の発生量を予測する。

(2) サクラ果実吸汁率調査

5月上旬よりサクラ果実の吸汁果率を調査し、吸汁果率が75%以上となると離脱期が予測される。

(3) ヒノキ毬果口針梢数調査

7月上旬よりヒノキ毬果への口針梢数を調査し、1球果あたりの口針梢数が25本以上となると離脱が予測される。

4 防除対策

(1) 飛来状況の確認

発生には地域差や園地差があるため、園内をよく観察し、飛来を確認したら防除を行う。カメムシの活動は薄暮時に活発となるため、夕方か早朝に防除を行うと効果的である。

(2) 好適な気象条件

果樹カメムシ類の飛来は夜温が25℃前後と高く、高湿度、風の弱い日に多くなる傾向があるため、天候に注意する。

(3) 薬剤選択

薬剤によってはカイガラムシ等の多発生を招くこともあるため、薬剤選択には注意する。